

第17回「京都御苑ずきの御近所さん」

青蓮院門跡 門主

東伏見 慈晃 様



■銀行勤めから仏門に入られたのが、50歳を超えられてからと伺いました。その御苦勞についてお聞かせください。

私の父は青蓮院門跡の門主をしておりました。門主は世襲制ではなく、代々天台宗の高僧が選ばれて就任しておりました。私の父がこちらに就任したのは昭和26年頃ですが、元々父はお坊さんではなく、京都大学の歴史の先生をしておりました。歴史の研究を通じ、歴史における仏教の影響が極めて大きなウエイトを占めていることが分かり、そのことをしっかり研究したいという思いで仏門に入り、戦前に得度しておりました。

明治維新後は皇室と仏教が完全に分離されました。即ち、明治政府が「廃仏毀釈、神仏分離令」を出し、仏教を否定しました。当時、門跡寺院はいくつもありましたが、皆、天皇のご親族の親王が門主になられていました。私の曾祖父は朝彦親王で、親王として青蓮院の門主をしておりました。しかし、明治政府は、天皇の一族が仏門に入ることは罷りならぬということで、親王の門主を全部辞めさせ僧籍を剥奪しました。今では考えられないくらい無茶苦茶なことをした訳です。朝彦親王の人生は波瀾万丈でした。孝明天皇の寵があつく、孝明天皇の側近としてお仕えしていましたが崩御後、当時の公家達、三条実美・岩倉具視などとは相対する立場であったため、広島に幽閉され、最後は伊勢神宮の祭主に任ぜられ、伊勢の神宮皇學館（現在の皇學館大学）を起すなどに尽力しました。最後は伊勢で終わりましたが、明治政府が新しく発足するにあたっては、^{くにのみや}久邇宮という中心的な宮家の初代になりました。

私の父は、祖父が朝彦親王であり、しかも青蓮院の門主だったということを非常に重要視していました。色々事情があったのですが、終戦直前に仏門に入りました。

父は久邇宮に産まれましたが、兄がいました。兄弟の中で2番目以降の男子は皇室典範で二十歳になると臣下に降りることになっていたため、二十歳で宮様ではなくなりました。しかし、戦前は今と違い宮様をものすごく祭り上げていましたから、臣下に降りたとはいって

も、ほとんど宮様扱いでした。そういった中で、父は仏門に入りましたが、皇室の人が仏門に入るといことは、仏教否定の宮内省は歓迎しませんでした。また、終戦後京都大学が左翼化し、その中で元宮様だったということを受け、大学に居づらくなっただけです。父は研究活動をずっと続けたかったと思うのですが、そういう事態に嫌気がさして、大学を辞めました。そこに天台宗の方から青蓮院門主のお話を頂き、こちらに入山しました。全くの学者だったので、僧侶の修行を小僧からした訳ではありません。

私は全く仏門とは関係ない道を目指して進みました。たまに東京からこちらに戻ってみますと、父が歳をとり、何事も滞っていて、また周りに誰も支える人も居ない、という様子を目にするようになりました。皇室にゆかりがあり繋がっている人が門跡寺院の門主になっていくということは明治政府が否定した訳ですから、他の門跡寺院も一切宗派が管理するという形になっていて、皇室関連の方が門主になっているところがどこにもないんですね。私の気持ちの中に、一つぐらいいはそういうことが繋がっていてもいいのではないかという思いがでてきました。また、私は銀行に勤めていたのですが、銀行の勤めの中で、仏教はほとんど関わりがありませんでした。日々の暮らしの中で、仏教の教えは全く皆さんの拠り所になっていないと感じました。もちろん皆さんはお亡くなりになると普通はお寺に納骨をし、墓地があり、大部分の方がお寺との関わりがある訳ですけど、それはお葬式とか先祖の回向とかお墓参りとかそういうことだけで繋がっていて、本来の仏教の教えが日々の人生の中に関わっていないと思いました。そういう隙間にオウム真理教等の新興宗教が入っていくことになっているのではないかという思いがありました。行事や儀式、先祖の供養も大切なことなのですが、本来の仏教が説いている教えが現実の社会に生かされ、それを拠り所にしていかなければという思いが大きく芽生えました。そのような理由で、銀行を辞めて父の後を継いでいこうと決心しました。天台宗も認めていただき一からのスタートとなりました。50歳の時です。

仏門に入りますと、天台宗は修行と学問（仏教学）の両方をしっかり出来ないという考えに基いていて、その修行というのが最初に60日間あるのですが、それが大変でした。運動部の強化合宿のような、もっと凄いかもかもしれません。60日間の修行は若い指導員が行うのですが、私のように50歳でそれなりに世間で一通りやってきたものが、まるで子供扱いでした。つまりその人が何をやっていたかや年齢等には関係なく、出来ないという怒鳴られたり怒られたりしました。こちらは漢文すら分からない訳ですから、お経の漢字を読むだけだった大変でした。しかし、それだけでは門主にはなれないので、その後天台学を修める専門学校と大学に行きました。専門学校が2年、大学院の修士課程と博士課程に5年通いました。論文等をすべて提出して、それも漢文の経典を調べて論じていく訳ですが、研究対象とするものは、それまで誰も研究対象としていない経典を直に読めないといけま

せん。そういう意味で大変でした。しかも父がもう高齢で手伝いが必要になっていたので、寺にすぐに入り、寺の雑事を色々こなしながらやっておりました。大学院は東京・駒込にある大正大学が天台宗の大学でして、そこへ新幹線で通いながら、1週間のうち東京に何日か居て、また戻ってきて京都で仕事をして、その間に難しい漢文の研究を進めました。その時はまだ50代だったので何とか乗り切れました。そんなことが大変だったということでしょうかね。

■著書の中に、座右の銘が書かれていますね。

それは、慈円が詠まれた「おほけなく うき世のたみに おほふ哉 わがたつ袖に すみそめの袖」という歌です。慈円は、平安時代の末期から鎌倉にかけての僧侶で、当時の仏教界の頂点にいた方です。天台宗の最上位の『天台座主』という位がありますけど、その座主を何度も勤め、平安貴族の頂点にもいた人です。一般の社会、大衆というもの、そういうものとはかけ離れた雲の上の人だった訳です。しかしながら、この歌の「うき世のたみ」というのは、『多くの一般大衆』のことで、「おほふ」は『おおいかけます』、「すみそめの袖」というのは『仏教の教え』ということです。つまり、多くの一般大衆に広く、隅々まで仏教の教えを広めたいということを歌っています。天台宗の最澄が同じようなことを言っていて、最澄の歌を念頭に置いた歌でもあります。簡単に言えば、社会的地位が高く、身分も高い人でしたが、もっと目線を低くして一般の社会に仏教の教えを広めたいと。鎌倉仏教が起きたのは、まさに法然や親鸞などの活動を通じてです。仏教の教えというのは奈良から始まって、飛鳥・奈良・平安時代と来て、最澄・空海にしても皆、皇室等、まず当時の権力の象徴的な人達に布教していました。それは、仏教と文化が密接な関係にあったからです。唐の時代、中国の唐の都・長安が世界の中で一番栄えていて、そこでは文化と仏教は一体となっていたんです。だから、当時の仏教を指導した僧は権力の力を借りて大きなお寺を建てました。大きなお寺を造るには装飾等を含め、科学技術が必要となります。上層階級の権力者の中では、科学技術を持つことが一つの力になっていました。現代で言うAIやロボット、あるいはiPS細胞等。そういうものと仏教の教えが一体になっていたということです。仏教の教えをもっと大衆に行き渡らせようというので、法然や親鸞、日蓮が出てきましたが、慈円も同じような立場でした。慈円は、当時一番の権力者の立場にいたのですが、法然、親鸞、日蓮等は全く違うところからそういうことに気がつきました。慈円は、当時の新興宗教であった浄土宗、浄土真宗に対して理解が深かったということがこの歌の中に込められています。それは今に置き換えてみると、お葬式や儀式だということではなく、伝統仏教の教えを

もっと人々の実際の生活の中の拠り所にしていかなければならないのじゃないかという思いが、私の原点なんです。この歌のように私も目指していきたいと思っています。

■青蓮院様は、文化と自然のいずれも大切にされていらっしゃると思いますが、特に自然や景観を守るために心掛けられていられることをお聞かせください。

伝統の門跡寺院として、文化の重みというかそれを次世代に繋いでいかなければいけません。象徴的なものとして受け継いでいる文化財と、それを取り巻くものとしての自然や環境、即ちクスノキの大きな木などがある訳ですが、当然のこととして、守り伝えていかなければと思います。

クスノキの前の道を神宮道というのですが、あのクスノキは京都市の天然記念物で、青蓮院のクスノキと名前が入っていて、一体となった道の景観を京都市の景観条例で残していきましょうということで唱われています。以前、マンション建設計画が出てきた時の話です。クスノキの根がマンション建設予定地の下まで伸びていました。大体、樹木の枝が伸びているところはその下まで根があるのですが、マンションが建つと根を掘り返して痛めるので、それを何とかして欲しいと随分マンションや業者さんと掛け合いました。また、将来マンションが建てば、住民から落ち葉を「掃除して欲しい」とか「片付けるのが大変だからその枝を切れ」など言われる事が予想されました。マンションに関しては、法定の『近隣説明事項』というのがあるのですが、マンションを販売する時には、例えば、「周りに学校があります」、「病院があります」、「墓地があります」等、言わないといけないことになっています。後から「墓地があるから不愉快だ」等ということにならないように、そういうことが義務付けられているんです。マンション建設の業者さんに、『近隣説明事項』の中に「枝が伸びてきていても、葉っぱが落ちて、文句を言いません」ということを書き入れて欲しいということを書き合った結果、認めてくれました。しかし、それだけでは駄目です。最初に買った人は「分かった」と言っているけど、それを転売したり、住人が変わると、後で買った人が「私は聞いていない」と言ってトラブルになります。だから、マンションの『管理規則』にも同じ内容を入れて貰えるように掛け合いました。交渉はものすごくハードルが高かったのですが、管理規則に入れてもらうことができたので今までまったく問題は起きていません。だから、実際にその環境を大切にしていくためには先を見越してしっかりと手を打っていくことが大切です。

しかし、今も未解決のままの問題があります。道路の上にクスノキの枝が伸びていますが、クスノキの樹齢は約800年と言われていています。木があんな形で何百年と路上に伸びていると、

枝が枯れて落ちてきます。もし、その下に車が走っていたら、枝が落ちて車にぶつかる、車の前に当たって運転出来なくなる、あるいは人にぶつかって怪我をしたり、人が亡くなるなどという可能性もある訳です。しかも巨木で高さは20m~30mくらいあるので、上の方から落ちてきたらものすごい衝撃です。クスノキというのは非常にもろい木なので折れやすいですし大木になっているので、かなり大きな枝が落ちてくる可能性もあります。高い所の枯れ木を除去しようとする、はしご車等をかけるので大掛かりで費用もかかるので、ある程度枯れてきてからまとめて処理しています。常時処理することができないので、そのうち枝が落ちて、事故になる可能性があります。それが一番起きやすいのが、台風と大雪の時です。今は天気予報がとても精緻になっていますので、台風と大雪は事前に分かります。だから私は警察に掛け合い、「台風と大雪は、事前に分かる限られた日なのだから、そういう時だけは道路を交通止めにしてください」とお願いしたら却下されました。警察だけではなく、景観条例に入っているので市や道路管理者等の関係者を全員呼び、その中で訴えたのですが、未だにこの問題は解決していません。警察側の主張は、道路交通法で、「道路の上には一切物が張り出してはいけない。道路の上へ出ている物は違法だ」と言う訳です。法律違反なので、「一切の枝を切れ」と言います。天然記念物だから切れないし、景観条例にも景観を守りましょうということになっているのですが、それでも警察は「切れ、違法だ」といっている訳です。絶対に譲らないので、にっちもさっちも行かない。それで、この問題をそのままにしてはいけないと思ったので、ボイスレコーダーを会議の場に置いて「会議の音声を録りますよ。もしそうおっしゃるんならば、違法だと言うだけではなくて、直ちに『違法だから枝を切りなさい』と命じてください」と言ったんですよ。そういう命令を出していただいたら、私は全国にキャンペーンをかけて、「こういう馬鹿なことを京都府警察は言っている」ということを訴えますよ、と行ったんです。京都は率先して環境を保全して環境を大切にしていかなきゃいけないし、文化を守っていかなきゃいけません。そういう価値があるからこそ多くの人が京都を訪れてくれる訳です。それを単に法律に従い道路の上に張り出しているから枝を切れと言われる。お寺ははしご車をかけて、枯枝になったものは定期的に切って一生懸命やっています。だけどこれは全体的に守っていかなくちゃいけないもので、それも年中落ちるのではなく、1年に1回あるかないかの時に落ちる可能性があるということで、その時くらいはちょっと通行止めにして注意すれば景観を守っていける訳ですよ。そういうことが理解出来ないっていうのはおかしいと、だから責任は行政側にあるんだと訴えたわけです。行政機関は本当にやらなくてはいけないのは何だということを生懸命考えて、必要ならば規則は変えていけばいい訳です。規則は後から出来たもので、その時はそうだったのかもしれないけれど、状況が変われば規則は合わなくなる時もあります。ところが、規則が一旦出来ると、そればかり死守してしまいます。その職にある人は規則を守ることしか

考えません。もっと広い視野でこれは何の為に出来た規則なのか、本来の目的は何なのかを考えて、しっかりとやっていかなくてはなりません。それが行政の本当の姿です。行政に限らず、その人その人が置かれている立場で一番やらなくてはいけないのは何なのかを考えてしっかりとやっていかなくてはと思うのです。

■今後、東伏見様は門主としてどのように活躍されたいですか？

先祖供養は大切ですが、先祖供養は何で大切なのかという心の問題だからです。自分と先祖は繋がっているんです。自分というのは1人1人単独に突然現れたわけじゃなくて、代々の先祖があって初めて自分があります。先祖を敬うことは、自分を敬うことです。そういう意味で先祖の供養や葬儀はあるのです。自分が大切だというのは、自分というのは何なのか、私って何なのかということを深く深く追求して最終的には悟りとなります。自分と他人、個と社会。自我のあり方を仏教は深く掘り下げています。仏教を生きた教えとして現代に具体的に広めていくことが一番のテーマですがこれが一番難しいことです。今、青龍殿を作り、そのお不動様は国宝ですのでしっかりお祀りしています。そのお力で多くの方を導いていただき、教えを広めていく。単に観光の名所を作ろうというような意図でやっている訳ではなく、しつらえをしっかりとすることによって多くの方の拠り所となっていく。基本的に、仏教の教えが日々の人々のよりどころになっていく。そういうことができないかと考えています。建物は700人近くの人が入れますけれど、教えを求めて、中がいっぱいになってあふれて、さらには周りまで人で詰まっていく。実際は難しいけれど、教えというものが皆さんの拠り所になって集まってきて頂きたいと思っています。

今、社会を構成している組織的なものは企業と役所です。それ以外は、農業や水産業などの第一次産業です。その中で一番大きな力を持っているのは企業です。これがしっかりしていなかったら国は全体として成り立ちません。その企業を形作っているのは人です。企業の幹部がいて、多くの人があるのもとで働いている。この企業の幹部の人達に出来るだけ教えを広げたいと思います。そういうキーになる人々がたくさん集まってくれば、裾野は自然と繋がっていくのかなという思いはあるのです。

また、政治にも関わっていかなくてはならないと思います。政教分離というのが当たり前のように憲法でいっていますが、私は政教一致だということを基本的に標榜しているんです。例えば、聖徳太子の十七条憲法は、政治と宗教とを一体として考えています。第一条「和をもって尊しとなす」。第二条「あつく三宝を敬え」。「三宝」とは「仏法僧」のことで「仏様」、「仏様の教え」と「僧侶」です。それが政治を行う建前の基本の条項の第二番目に入っ

ています。この時代から日本の思想というのは政教一致だったのです。仏教は、「人のために尽くすことが自分の幸せになる」というのが教えの中心です。仏教を中心に日本の国政をしたら、福祉などはもっと考えなくてはならず、また教育も全部無料にしなければいけません。そういう意味で、最終的に仏教が政治にもっと関わらなくてはいけないと思っています。

■東伏見様の思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？

昔、叢華殿という建物が京都御所の中にあり、久邇宮の屋敷でした。それを久邇宮の朝彦親王がこちらの門主になった時にその建物を青蓮院へ移しました。御所とはそういう深い繋がりがあります。また久邇宮邸跡地が御苑の傍にあります。

以前はランニングをしていて、御苑まで走っていました。ここから往復すると約10kmくらいです。御所の中央の建礼門の前をまっすぐ奥まで行って、京都御所を一回り廻って戻って来るのは、なかなか快適でした。最近は止めましたが、5～6年前まで走っていました。

■京都御苑の今後について、ご意見等ございましたら自由におっしゃってください。

良く管理されていると思います。私は全然知らなくて、御苑は宮内庁が全部管轄していると思っていました。御苑という位置づけもよく理解していませんでしたが、御苑内はマツが多くあるので、マツをしっかり保存していただきたいと思います。東京の二重橋の前にたくさんマツがありますが、あのマツは凄いです。本当に樹形も良いし、しかもすごく年月が経っています。当然庭園管理もされていると思いますが、あのマツが枯れてないのが不思議です。京都御苑でもマツを枯らさないように管理していただきたいです。

2017年3月6日 インタビュー

聞き手：田村省二、山本昌世

○東伏見 慈晃さま プロフィール○

1942年京都府生まれ。青蓮院門跡東伏見慈治前門主（香淳皇太后陛下実弟）の次男。66年中央大学法学部卒業。銀行勤務を経て、93年得度、青蓮院に入山。94年より叡山学院研究科、96年より大正大学大学院仏教学科にて仏教学・天台学を研究、2001年3月に同仏教学科博士課程を修了。2003年、青蓮院門跡第49世御門主を拝命。著書に『青不動のころ』（玉川大学出版部）がある。